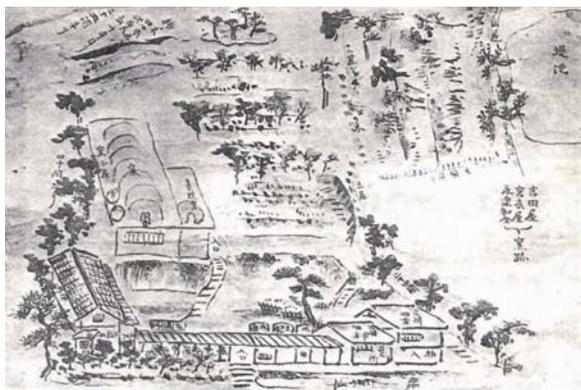


九谷焼の世界に触れる

ふかよみ九谷ヒストリア（全10話5話）
「再興九谷の雄 吉田屋窯探究（上）」

古九谷が廃窯して百数年後、金沢の卯辰山に京焼の名工青木木米を聘して加賀藩が開いた春日山窯、および木米の助工だった本多貞吉が発見した花坂陶石で磁器を焼いた加賀藩窯若杉窯が、再興九谷の先鞭をつけました。文化文政期の全国的な陶業勃興ブームの中で、古九谷窯の閉窯を惜しみ、再興することに大きな夢を持った者たちがいきました。大聖寺城下の豪商で博学多趣味の吉田屋伝右衛門、そして粟生



山代再興九谷窯（山代吉田屋窯・宮本屋窯・九谷本窯）配置見取図『九谷陶磁史』（松本佐太郎著）より

屋源右衛門ら若杉窯の若い陶工たちです。両者に接点はありませんでした。ときは文政五年（一八二二）と思われるのですが、大聖寺藩領内の串茶屋という茶屋街で、とある茶屋の花魁が仲立ちをして両者を出会わせた事実が伝えられています。このとき古九谷窯再興にむけ大きく歴史が動きました。翌年、吉田屋は大聖寺藩庁に対して、九谷村で窯業準備をする上でのさまざまな権利付与を願っています。九谷村での土地借り上げ願いや物資を運ぶ仮橋の敷設願、九谷村役（肝煎）宅での宿泊願い等々、念の入った願い書です。大聖寺町会所や藩庁から多額の借銀をし、吉田屋本人も身銭を投入しました。文政七年夏、初窯を焚いたのですが、同九年に山代温泉郊外越中谷に窯を移すまで、おおよそ今の円に換算して一億を超す額を投資しました。吉田屋窯は初期の段階から古九谷青手様式を踏襲した製品を制作しました。やや鼠色がかった素地で、可塑性を高めるため九谷陶石に若干陶土を混ぜたと言

われています。絵具は緑、黄、紫、紺青、古九谷を彷彿とさせますが、意匠は独自性を持つています。絵付けに絵師でもある鍋屋丈助が参画したことが大きいといえます。逸品主義を貫く吉田屋の製品は、当時から九谷焼や新九谷と呼ばれました。これによって、江戸時代前期の古窯製品を古九谷、古九谷焼と呼ぶようになったのです。

文化三年（一八〇六）当時、京焼の名工青木木米は、加賀にはかつて九谷窯があり、良磁であるとし、九谷陶石で試し焼きした製品の磁味は、九谷焼の古製を彷彿とさせるとの認識を示しています。文政十二年（二二九）当時、京にいた漢学者頼山陽は吉田屋の製品を「九谷焼」と呼び、山陽が区別できなかった古九谷と吉田屋の製品を見分ける鑑識眼をもった文人仲間が京にいたことを、知人に宛てた手紙に書いています。京に於いて加賀の所産である古九谷と吉田屋は高く評価されていたのです。

文：九谷焼資料館館長 中矢進一

ひぼ・ゆずのEcoでえこっさ

【生ごみ、紙くずなどの「燃やすごみ」のポイント】

- ・洗面器、CD（ケースも）、文房具、おもちゃなどのプラスチック製品
- ・くつ、バッグ、木製ハンガーなど（金具がついていても大丈夫です）
- ・汚れの落ちないペットボトルやプラ（ケチャップやトレーなど）
- ・紙おむつや保冷剤

【ごみを減らすために…】

- ・食品の買い過ぎ・作り過ぎ・食べ残しをなくす。生ごみはしっかり水切りを。
- ・刈り草は1日天日干しすると重さや量がぐっと減ります。

問い合わせ 生活環境課（☎ 58-2217）



人口と世帯数

2019年5月1日現在

- 人口 50,185人
(前月比+132)
男 24,940人 女 25,245人
- 世帯数 19,092世帯
(前月比+188)